

被服の変遷に関する一考察

その2. 古代の服飾 弥生式文化

古元千鶴子

序 説

日本の国土に最初の生活を営んだ人々が、縄文式文化を築き弥生式と呼ばれる土器の使用される時代に入った。縄文式弥生式両土器の関係については、未解決な点があるが、両者の製作技術や形態を比較して生活の差異を見ることが出来る。又搬出された材料と器具類についても、技術の精巧さ種類の豊富さ等により明らかに変化があり発展のあとが見られる。この進歩はこの時期に農耕生活が開始されたことに関連し、農耕を営むことによって人々は土地に定着し集団化したため生活の様式に著しい変化が生じてきた。更にこの時期において大陸から金属器の製作技術が、伝わり急激な進展が見られ、石製器具と金属製器具との利用価値の相違は、それ等を使用する人々の生活段階の相違を示すもので、この利器により耕作に大規模な共同作業が可能となるに伴って有能な指導者が出現し、強力な支配者層の成立となり、地域的小国家形成の機運となったこの過程において被服の史的発達の流れの中にもみるべきものがあり、第1報に引続いて弥生式時代の文化所産である初期農耕文化農耕生活の出現と、初期金属文化最初の金属器について究めよう。

2. 農耕生活の出現 弥生式文化

縄文式文化に続き前三世紀から後三世紀迄約六百年間続いた弥生式文化は、狩猟・魚撈の自然採集経済生活の原始的なものから、朝鮮乃至中国の大陸文化の影響により日本における稲作農耕が始められ、農耕文化が確立し原始未開の域を脱出したものと考えられている。石器の形や機能にも大きな変化が起り、鉄や青銅製の道具が輸入され、石器と金属器とを併せて用いた金・石併用時代の文化ともいわれ、当時用いられた特徴のある弥生式土器は、東京本郷弥生町の貝塚から1884年に発見され形や文様に特色があるので、発見地を記念して名付けられ、弥生式文化は弥生式土器によって代表される文化ともいわれる。

(1) 弥生式土器

弥生式土器は器形が優美端麗で、前期中期後期の三期に大きく編年され、何れも轆轤を用いず整形し酸化焰で焼かれたあか焼の土器で明褐色であり丹塗りのものもある。全体薄手に作られ文様は簡素で少く櫛の歯状の施文具を用いた櫛目文・貝殻文・縄文が見られる。縄文は特に東日本に限られ櫛目文は九州から関東地方に拡がった時を中期とするが、後期になると次第に文様が簡略化され器面装飾が見られなくなる。弥生式土器には壺・甕・高杯・鉢の四つの基本形があり、違った用途をもっていた。壺は貯蔵用、甕は煮炊き用、高杯と鉢は食物を盛るための容器で、米を蒸すための甕も見られ、常に組合され又一揃いとして用いられた。この時代の土器の流れを把握しながら、岡山県及び県北部の郷土である作州の地は、最近津山弥生式住居址遺跡や津山盆地の群集墳で知られ、その美作国の古代の人々の生活の真の姿の一端にもふれてみよう。

① 壺 弥生前期
奈良県唐古出土……初期に作られたのは北九州で、福岡県板付にある遺跡から出土

農耕生活の出現

弥生式文化

弥生式土器

① 壺 弥生前期 奈良県磯城郡 田原本町唐古出土 高 28.5 ㎝	② 壺 弥生中期 宮崎県西臼杵郡 岩土村出土 高 23.4 ㎝	③ 顔面附壺 弥生中期 茨城県下館市 女方出土 高 69.5 ㎝	④ 台付甕 弥生後期 静岡県田方郡 山木遺跡出土 高 21 ㎝	⑤ 丹彩壺 弥生後期 名古屋市熱田区 高倉貝塚出土 高 31.5 ㎝	⑥ 台付壺 弥生後期 富山市千原崎出土 高 18 ㎝
⑦ 壺 弥生中期 岡山市上伊福 遺跡出土 高 30 ㎝	⑧ 鉢 弥生後期 岡山県津山市沼 津山弥生住居址群 遺跡出土 高 12 ㎝	⑨ 高杯 弥生後期 岡山県倉敷市 酒津出土 高 25 ㎝	⑩ 大形鉢 弥生後期 岡山県津山市沼 津山弥生住居址群 遺跡出土 高 26 ㎝	⑪ 壺 弥生後期 岡山県都窪郡 庄村出土 高 41 ㎝	⑫ 器台 弥生後期 岡山県都窪郡 庄村出土 高 60 ㎝

漁 獵 具

日 用 器 具

石庖丁
岡山県英田郡美作町明見出土

木 鉢

弓
奈良県唐古池

石槍

磨製石斧
岡山県津山市
野介代出土

環状石斧
岡山県勝田郡
勝央町黒土出土

木高杯

片口付の木の浅鉢
直径 29.5 ㎝
静岡県山木遺跡
木 匙

杵

石 鏃
岡山県真庭
郡美和村出土

磨製石鏃

土錘
岡山県都窪郡
庄村上東出土

石錘
岡山県苫田郡
鏡野町郷地出土

蛤刃石斧
岡山県真庭郡
川東村西原出土

砥石
岡山県真庭郡
美和村余野上出土

抉り入り石斧
岡山県那岐
山麓出土

木杓

高床倉庫用の木製はしご
静岡県山木出土

柱にはめたまま発見された
鼠返し
静岡県山木遺跡出土
水田のあと

紡錘車
岡山県津山市
皿寺山出土

馬 鍬

木槌

鋤

石 鎌

鍬

田下駄

えぶり 木製巾39.5 ㎝
静岡県田方郡韮山村山木遺跡

したので板付式土器とよばれる。順次瀬戸内海を急速度に通じ伝播し、大阪湾沿岸と大和盆地に根を下した。器形は胴が強く張り高さと同径の大きさが同じで頸がしまり、口縁がそり、全体に薄手に作られたくましい力強さをもっている。頸と胴に三線と胴には杉綾文が施されている。奈良県唐古遺跡は、土器、石器のほか鋏、杵、片口、鉢等の多数の木器が発見され、弥生式時代に木器が使用された事が始めて分った。岡山県邑久郡邑久町門田出土の椀形土器は小形で、器形は美しく歪みがなく灰褐色にくすみ前期の特徴をもっている。

② 壺 弥生中期
宮崎県岩土村出土……全体に黄褐色を呈し、口縁部は水平の鑿がつけられ、その上に鋌頭のような小粘土の粒を貼り付けている。階段状の掘り深い突帯に底すぼまりの均齊ある器形をしている。中期になると様式が地域的にかなりの差違が見られる。当大学の敷地は岡山市上伊福遺跡で主として河川により自然堤防をその立地として利用しながら出現した所であり、内海地方において平野のど真中に弥生式の大集落が、中島遺跡岡山県都窪郡庄村と共に出来た所だが、基礎工事中発見された⑦の土器は、前述の壺に似たところがある。口縁部は水平の1 厘巾の鑿がつけられ、縦に直線文が刻まれ、頸は階段状になり胴はなだらかな線と美しい張りをもち、自然に底がすぼまり器面は黄褐色で、平滑であり胴の一部に煤色を呈している。

③ 顔面附壺 弥生中期
茨城県下館市出土……胴長の壺の口頸部に人の顔の珍しい土器で、目・鼻・口・耳・顎の部分は粘土紐で押つけてかためている。耳には三つの小穴、瞳は小穴が掘られ、目・口まわりに細線を彫り朱彩しいれずみがある。縄文式土器と弥生式土器両者の性格を兼ねる接触式土器とよばれている。縄文土偶の影響をうけて作られたこの壺は、稲作農耕を営んだ弥生式時代の人々により農神を祀る祭器の一種として使用されたものらしい。多く北関東と福島県で発見され、粗末な土器で荒い刷毛目が目立っている。

④ 台付甕 弥生後期
静岡県山木遺跡出土……胴のふくらみより、ややせばまった口と、凹凸に横線文を細工された装飾的な口縁部と胴と台とが、よそゆきの感じで作られている。器面は荒い刷毛目で整形されているが、そのころ伊勢湾沿岸から東海にかけて独得な型を生み、甕に台をつける方法が始められた。煮炊き用の甕にしては口縁部の飾りからして、山幸の粟でもゆでる位の甕かも分らない。

⑤ 丹彩壺 弥生後期
名古屋市高倉貝塚出土……弥生式土器中の宮廷様式と讃える人もあり、愛知県熱田・瑞穂の貝塚に多く見られる。この形式は伊勢湾沿岸地方で、中期後半から後期にかけて独自のもので、壺の肩に大きな丸窓をうがった土器・手焙りの形に似た器・魚形土器等が作られた。根強い縄文文化の伝統を残し東日本的で、丹塗りの壺は美しい器形を作っている。施文して彩色するのが一般的だが、焼成後塗彩されたのも見られる。ふくれた胴に浅い漏斗状に開いた口頸部をつけ口縁部に凹線文を数条つけるために巾をもたせ、四本一組の縦の突線が三ヶ所に、口縁の内側にゆるい段があり、繊細な羽状文が施され、頸部から胴の半ばにかけて三本の連続の山形文が刻まれ、その間に細い楕円の直線文がめぐらされ腹部に刺突文があり、これから下が彩色されている。口縁内の羽状文の飾られた下の部分と口縁外面と連続山形文等の上に赤く塗られている。倉敷考古館蔵邑久郡邑久町門田出土の弥生前期の彩色土器片には、杉綾文と斜格子文の二模様を描かれている。

⑥ 台付壺 弥生後期
富山市千原崎出土……大きな口に台のついた複雑な器形をした珍しい土器である。全体薄く轆轤を使ったかと思われる程形がよく成形の美しさは際立っている。畿内では輪積み法がとられた以外粘土の紐を巻き上げる法によっている。山陰地方の影響をかなり受けている壺である。

⑧ 鉢形土器 弥生後期
岡山県津山弥生住居址出土……口縁が僅かに広がった比較的浅い土器であり、口縁部には線という程でもない凹みが繞る。胴部外面は篋で整形され、胴部内面にも篋削りが施されている。全体として明褐色を呈し、一部には黒斑もあり、粗面となっている部分が多い。口径15.5㎝、頸部径14.5㎝、胴最大径15㎝、高さ12㎝である。銅鐸の絵に、たち杵で臼のみみを脱穀している2人の姿が画かれているが、当時の人々は精米をする程迄には至らず、殆ど玄米に近いものを食べたと考えられる。鉢型土器に食物を盛るほかに、玄米を入れ火にかけ、粥や御飯もたいたといわれる。

⑨ 高杯形土器 弥生後期
岡山県倉敷市酒津……すっきりと簡素な感じを与え、均斉のとれた明褐色の土器である。

⑩ 大形鉢形土器 弥生後期
津山弥生住居址出土……胴部の張った扁球状の器体に「く」の字形に曲折した短い口頸部がつき、口縁は僅かに外側に広がり、胴部が口縁部や頸部に比してよく張った比較的浅い土器である。僅かに外の方に開いた口縁部には四条の凹線が繞り、頸部から胴上半部にかけて大きい把手を貼付けている。胴部外面には刷毛目が施され、更に篋状のもので整形され胴の最も張り出した部分には篩齒による押圧刻目文が繞され、胴部内面には粗い刷毛目が施されるという特徴を持っている。竪穴住居の堆積した黒土中から出土したもので、この一帯は出土土器量の総量が少く、細片が多いので住居廃棄時に土器を持運んだ可能性が強く、持運ばねばならない程当時貴重なものであった事を示しているのではないかと考えられる。口径27㎝、頸部径24㎝、胴最大径34㎝、高さ26㎝。

⑪ 長頸壺 弥生後期
岡山県都窪郡庄……長頸部に21条のごく浅い平行凹線文があり、口縁部と長頸から胴、胴から底に至る形が優美でよい。黄褐色だが一部に黒い煤が付着している。烏らしい画のある土器に接し生活の一面にふれたようだ。当時遺跡にあげられる山幸を動物、鳥類に求めてみると、登呂遺跡で鶏の骨が発掘されているし、南方アジアの稲作農耕民が野鶏を飼いならしていた事を考え、鶏が重要な家畜として飼われた事が察せられ、ひよこではないかと思う。とさかがなく小さい口ばしと眼、頭部の曲線が見え、尾、羽根を少し伸し木の上にとまっているようだ。身近に接する鳥の表現ではないだろうか。

⑫ 器台形土器 弥生後期
岡山県弥生後期遺跡……器台は、器の台になるもので、現在の生活にあまりみかけない。単なる器でなく特別な儀式に関係があったり、特別な物をのせたりするものらしく、美しく飾られた大きなものもある。岡山県弥生後期の遺跡から数多く出土している。

山地に住むと山幸は大切な食料で、貝塚の場合植物質のものは腐るが、年中水のためっていた低地では動物の骨は腐り、木実、米穀の類は長い間に下層で泥炭化する。泥炭層等の遺跡から、粟・椎・木通・銀杏・柿・榎・胡桃・トムノ木・クロクワイ等の多くの遺物が発見される。秋は木の実を拾い冬の貯えをしたのだろう。青森県亀岡泥炭層で、クロクワイがぎっしりとつまった三つの壺が発見され、食物や種子の貯蔵用にもなった。彼等は彼等なりに、草木の根茎を乾燥し甘味を出させたり、日向に干して海藻等の表面の塩の結晶をとり、食物の乾燥、塩漬や燻製もしたのだろう。内海に近い邑久郡邑久町門田出土の弥生前期の土器と、作州の地にも土器の底部に靱痕のついた土器が発見されている。その靱殻あとはふくらみがあり米が短形であった。津山市沼住居址で採集された弥生住居の炭化した建築材料も出土されている。岡山市津島のグラウンドで炭火米が発見されたが、この米は当時火にかかった米倉から大量に発見されたもので、米倉の火事はその頃の集落として一大事だっただろう。初期の弥生式土器や、炭火した米の発見、中期から後期

にかけて進歩した土器、遺跡からの数多く見られる籾あと土器、籾殻層等の発掘で、その分布を考えると、新文化は北九州から次第に東方に普及していった事が知らされる。当時の住居跡は低湿地に近く出土する米粒が短形で水稲を耕作していたものと考えられる。米の原産地は大体インドのデカン高原といわれ、中国では約五千年前揚子江付近で水稲が作られたらしい。現在南支、インド、仏印、台湾は長形の粒のものを作り、北支では短形であるため、弥生式文化の稲作は水稲で北支系のものであるといわれる。後述される原始衣服にも北方系の文化と、南方系の文化とに分けてみられる点もある。

(2) 水田耕作

愛知県保美貝塚の一箇所で五千個以上の石鍬が出土された。縄文時代ではあったが、原料の関係から分業で石器生産していたらしい。信濃の和田峠付近しか生産されない黒耀石が近畿の東部から関東東部の広地域で石鍬の材料に用いられたのは生産物の交易が行われたと考えられる。縄文末期から石斧を使用して焼畑式農法による畑作が行われ、瓜、胡麻、蕎麦、里芋等の栽培跡が認められる。人々は獲物を追い居を変える事が少くなり、土地に定着し集団的な作業による農耕生活を受ける準備が出来つつあった。西暦紀元前一・二世紀の頃西方に新文化が生成し、この文化は大陸の周末から前漢時代の文化に源を発するらしく、磨製石器を使用し、後期金属器を用いて農耕を行ういわゆる弥生式文化であった。登呂遺跡は弥生式文化の中末期の水田を伴った集落地で、住居地域と矢板と木柵の並行する地域に分れ、後者は住居地域の東南方の広地域をしめ、鉄器を用いて削ったと考えられる矢板や木柵を東西南北に大体直線に、一枚の田は最大2,396m²～最小842m²の広さに区切り、住居地域より一段低くし水田耕作地とし、耕作地での遺物の出土はなく、柵列の周囲で発見され、柵列は畦と野獣の害を防ぐ役をしていた。鉄製品は用いられたらしいがその遺物はない。この遺跡では大麦・小麦・蕎麦・粟・稗・瓢箪・麻・白豌豆・水瓜、真桑瓜等の畑作の生産物があり、低地で水田耕作しつつ藁畑を作り、台地に住む者は畑作を行っていた。水稲栽培が始められたその用具に、田下駄・大足・田舟・木製の鋤・鍬・脱穀用の杵等の農具が唐古、登呂の両遺跡から又山木遺跡よりえぶりが見られ、成熟した稲を刈り取るためには石製の穂摘み具石庖丁が用いられた。その石庖丁は穴に紐を通し手にかけて稲穂をつみ、大きな蛤刃の石斧は弥生時代の特徴ある道具で開墾の道具であった。鉄器も使用されたが貴重品だったらしい。使用された石庖丁や片刃石斧等も北支系であるといわれ、稲を束ね高床の倉庫に納め、倉庫に出入りするため一本造りの梯子がかけられ、柱の根もとに鼠返しを取りつけられていた。狩猟・漁撈も行なわれイヌガヤ製の丸木弓・石鍬・銅鍬・骨角製鈎針・魚網用の石錘等も発見されている。古事記の海幸・山幸の物語の如く日本列島の沿海は優れた漁場で、遺物から見ると、四十種程の魚類のほか海獣類迄夥しい種類であり、深海魚や海底魚を捕るためには、丸木舟に乗り海に出て、石錘をつけた網を使い、直径10程の石錘を使用する網の大きさは、二、三尋に及び、沖魚や鯨等は多くの人々の協業としたであろう。木製品として臼・杵・槽・杓子・椀・皿・盤・高杯・片口・腰かけその他用途不明の品が多量に発見されている。発火具として、火鑽り板と弓が発見され弥生式文化の中期には弓鑽りの法が一般に行われていたであろう。織物は弥生時代になり稲作農業と共に現われ、縄文時代の衣生活は皮革の類を中心として、いくらかの編物と組物とがあったにすぎない。漁網その他の編物の技術は明らかでないにしても漁網の重りである石錘等で堅機のように重錘をつけて行われたのかも知れない。機織具や紡績具が唐古や登呂の遺跡から弥生式前期に発見されている。土製・石製・木製・鹿角製の紡錘車は多く弥生式の遺跡から出土している。木器類は経巻具(藤)・緯越具(杼)・緯打具(笊)・布巻具(千巻)等の機織具等が出土され、腰掛もその用具の一つとされ、当時の織機は腰掛に坐って織る台のない地機、いざり機、神代機に近いものであった。麻の繊維は機織具の存在とあいまって発達した事を示し、カジノキ・コウ

ゾ・カラムシ等の繊維もあった。魏志倭人伝に「種禾稻紵麻，蚕桑絹績，出細紵縑繻」とかいう文字もみえ、稲作のほかには紵麻も栽培していたし、養蚕して絹糸もつむぎ、かなり上等な麻布、絹織物、それに木線布等も織っていたようである。恐らく東海の登呂あたりではないだろう。食器類として木製の皿・椀・鉢・蓋・高杯・杓子もあり、貝殻も利用され、団栗等の木実を石棒と石皿ですりつぶして澱粉にする石器類、石匙・石筥・石庖丁も使用され庖丁は石のほか骨角製の刃物の後、青銅器も使ったであろう。木製の耕具や容器類のほか住居を作る用材を伐ったり割ったりするのに石器が大いに使用された。当時の住居は縄文時代と同様竪穴式であったが、水田に近く村落を営む必要上河川に接した自然堤防の上に沖積低地に進出する傾向が強くなった。倉庫や多量の農耕用具を作るため木工が盛んに行われ、鋭い鉄製工具がその原動力となり、農耕生活により人々は安住し生活に工夫をこらす事も重なり、各種の器具の形状や製法が前代に比してはるかに進んだ。県北部の山間地域の作州にも、谷傾斜面、丘陵上に農耕を営み住んだ遺跡が見られ、弥生式中期後期の土器・土器片・石庖丁・蛤刃石斧・石錘・扶入石斧等が発見されている。「弥生式文化における集落立地の性格は常に低地性という言葉を通じて強調される」。遺跡立地の低地と沖積地進出性があげられ、水稻耕作を基本的な生産部門にしようと努力し基調としていた事が明らかだが、山間に恵まれた豊かな河川による沖積化と、廻々に湿潤な土地を形成しつつ、谷間に流れる水、湧水を灌漑用水に転化し、山と山との・丘陵と丘陵との間の谷、谷頭利用の耕地が、段々式の水田として完成された姿であった。この閉析扇状地上に自然灌漑可能な新成沖積地に湿地を求めて弥生式の集落は誕生し、農耕社会を成立させていったと考えられる。収穫量は低湿地に比し格段の差があるが、山間部でありながら、僅かな能力で容易にしかも至るところに求められる事が出来たので、漸次河川を遡り「山高き」方向へと文化は拡っていったのであろう。進展のゆるやかに見える当地方にも、真庭郡久世町大旦遺跡に貯蔵庫群があり、勝田郡奈義町野田遺跡に高床倉庫地がある。津山弥生式住居については別に述べたい。登呂遺跡で住居地帯の北部に首長等がいたと思われる住居群を中心に西方にわたって多くの小住宅散在し、背後の森林の中に高床式家屋が建てられた。高床式家屋は恐らく部落共存の倉庫で貯蔵した穀物の湿気を防ぐための建築様式であろう。日本の水田耕作は気候の関係から生産を高める集約農法をを必要とした。登呂の耕作地域に見られる区切りは、一人当りの土地とも考えられ、一家の労働力で耕作し得る広さであった。堅穴に住む十名以下の家族と、それを幾つか集めた協業体を単位とした部落の社会では、協業体の土地をこのような面積に分割したのであろう。農業が主要な生産手段となり集落も拡大し共同生活の面も増加すると、同じ血縁の意識を基にし、同一祖先をもつ氏族の考えが政治的に進み、一方では生産物の蓄積により人々に貧富の差が生まれ、中には奴隷化する様子も現れた。原始的な氏族制はくずれ各協業体の首長は固定した地位を得て、別に住居を構え、金属器等の大陸文化をとり入れた者は一層強大となり付近の土地を併せるようになり、邪馬台国のような部落国家から、国家形成への第一歩を踏み出していることが示されている。

3. 最初の金属器

弥生式文化は新しく青銅器・鉄器等の金属器を受入れ、石器時代から金属器時代へと移行した時代であった。弥生文化前期・中期項迄は石斧・石鏃・石槍・石庖丁等の石器類の発見が多く、金属が貴重品でもあり、一般化されていないことを示し、石器と併用された。後期になると殆ど石器が姿を消し、鉄器が普及した。石器に比して形態と技術の点で、はるかに高度の金属器が使用されるに至ったことは、人々の生活意識に深い影響を及ぼし生活文化の発達をもたらしたことであろう。一方用具の面では、銅劍、銅鈴は西日本、銅鐸は中部日本を中心として分布し、銅劍・

最初の金属器

弥生式文化

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
石 劍				狭鋒銅矛	広鋒銅矛	広鋒銅戈	平形銅劍	有柄細形銅劍	細身銅劍
				福岡県出土	長崎県出土	福岡県糸田町出土	岡山県瑜珈山出土	福岡県三雲出土	岡山県児島市由伽出土
					長	長	長	長	
					84.8 ㎝	36.6 ㎝	46.7 ㎝	51.5 ㎝	

銅 釧

巴形銅器

香川県石田村出土

銅 鏃

岡山県児島市由伽出土

銅鐸面の絵画

機を織る姿

鹿を弓で射る人

いもりとすっぽん

臼を杵で搗く二人

犬五匹にとりまかれ
猪を射る人

高床の穀倉

壺
弥生後期
岡山県倉敷市酒津
出土

舟の絵のある壺
弥生中期
奈良県磯城郡
唐古出土

流水文銅鐸
兵庫県豊岡市
出土
高 45.5 ㎝

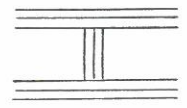
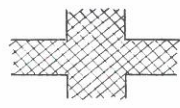
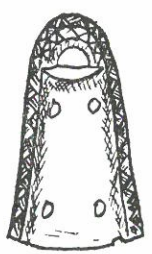
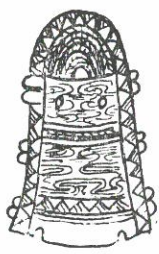
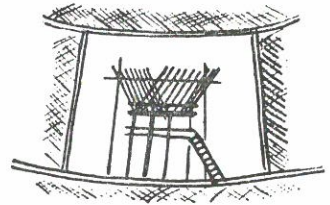
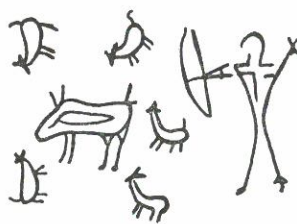
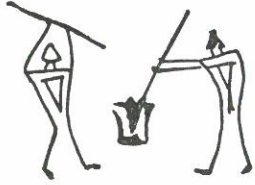
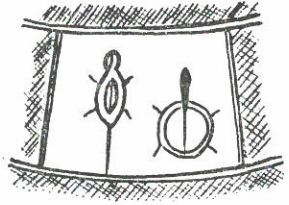
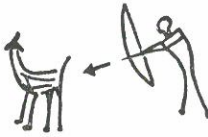
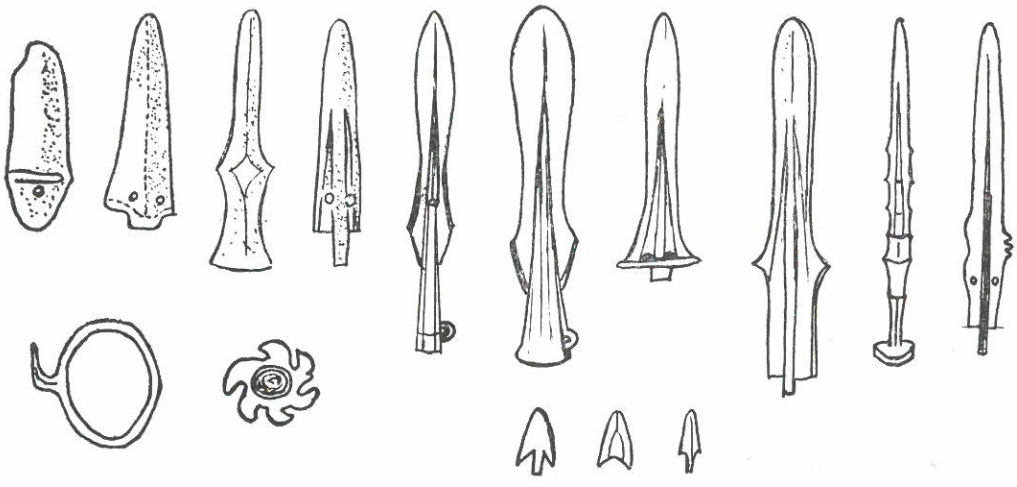
袈裟文銅鐸
香川県出土
高 42.7 ㎝

袈裟文銅鐸
岡山県勝田郡
勝央町植月念仏塚
出土
高 43 ㎝

流水文

袈裟文

突線帯式



銅鈴・銅鐸は祭器的な銅器としてこの時代を特徴づけられる。

(1) 金印 福岡県糟屋郡志賀町叶ノ崎出土……黄金の印で蛇鈕付、一辺漢尺の一寸にあたる2.3 ㎝台印の厚さ0.8 ㎝高さ約2.3 ㎝で、漢尺一寸立方に彫り上げている。重量108 瓦印面は隸書体の白文「漢委奴国王」の五文字で、漢の一字を長く大きく、委奴と国王を二字ずつ二行に配置してある。漢の倭奴の国王という意味で委は倭を略し、奴は儺県、那津の「な」にあたる。福岡市付近の古地名である。当時わが国と漢との間に交渉があったことが知られる。後漢書東夷伝・光武本紀中元二年の条に「倭奴国奉貢朝賀，使人自称大夫，倭国之極南界也，光武賜以印授」とある。倭の奴国王が漢に朝貢して印授を受けたと記され、漢の光武帝の建武中元二年（57年）のことで、印授はこの金印をさしたものらしい。天明四年（1784年）百姓甚兵衛が志賀島で発見37年後文政三年（1820年）組頭等からの届出の書類に「田境の小溝仕直し岸を崩し候処、追々小石掘出し候内二人持之石掘除け候処、下より金印を掘り出し候云々……」と記されている。二人持の石を除いた下から発見したとあるので、奴国王を葬った箱式棺があったのではないかと考える人もあるが明確なことは解らない。日本の服飾文化史にも縁が深いので、こゝにあげておく。

(2) 銅剣・銅矛・銅戈

金属器がはじめてわが国に輸入されたのは、北九州で輸入された剣・矛・戈の利器は刃が鋭利で武器に用いられ、特殊の豪族や権力者が所有した。日本が作られたものは、非戦動的な刃巾の広い大型品となり、宝器的・宗教的な儀器としての用途にあてられた。この弥生式時代の青銅製利器は、何れも両刃で鐙を中央にして両側に樋が通っている。戈はもとに短い棒状の茎があり柄を付けるようになっている。矛は茎が袋状になって柄に挿入する。戈はもと部が広がり関があり、茎が扁平で柄は身を直行するようにとりつけられる。青銅の利器は身の細い鋭利な実用的なものは、中国・朝鮮から輸入された品で、装飾文をつけたり身巾の広い大形のもの等は利器として非実用的なもので日本で作られたものである。細形銅剣・狭鋒銅矛・狭鋒銅戈の船載品は、北九州特に福岡県を中心とした地方の甕棺等から副葬品として出土している。次の時期に銅矛・銅戈が北九州で鑄造されるようになり、刃巾が広くなり中鋒銅矛、中鋒銅戈とよばれているが、砂岩製のそれ等を鑄た鑄型が北九州で発見されている。船載品は甕棺に副葬され、国産品は丘陵斜面等の住居や墓と無関係な所に単独で出土されている。船載品の銅利器が国産されるようになり、儀礼的なもの、集団の所有となったといわれる。次期中部瀬戸内・愛媛・香川県を中心とした地方に平形銅剣が国産されたが、扁平で利器としての実用性はない。銅利器は北九州・中国・四国を中心として、東は長野県に及んでいる。

(3) 銅鐸

鐘形の青銅器で、身と鈕と鱗とから成立している。大きさ20 ㎝以下のものから1 米を越えるの迄大小様々である。身の横断面は扁円形、左右に突出している帯状の部分を鱗、上端は両側から半円形に連なり鈕となる。起原は詳かでないが、朝鮮から発見される車馬具としての小銅鐸（銀鐸）に類似するので何か関係があるのだろう。銅鐸の内部は半円形の環を備えたもの二例銅製の舌を伴出したもの三例が知られている。明らかに楽器だが大多数は付加物がなく人里離れた山中に埋藏されて発見されるので、祭事のため用いられた神聖なものであったと推定される。銅鐸の分布は東は静岡・岐阜・石川を境に、西は香川・広島・高知・島根を境として、近畿とその周辺地区に中心がある。区分を、横帯文式、定型式、突線帯式の三区別とする。横帯文様式は小形で厚手であり、錫の含有量多く横帯を構成する。定型式は流水文・袈裟文の二文様で絵画を鑄出したものもある。突線帯式は突線で、縦横の文様帯を区切る。鈕や鱗の外側に円形又は半円形の飾りがつき、薄手で錫の含有量が少なく大型で135 ㎝に達するものもある。

①流水文銅鐸……身に流水文があるので、流水文銅鐸とよぶ。扁円形の身の両側に鱗がつき三

個づつ飾耳がある。身の上に半円形で鋸歯文や杉綾文のある鈕がつけられている。身の中央に横帯があるので横帯文式といい最も古い。代表的な鐸の定型式は、身の文様が四乃至六区に割された袈裟禪文銅鐸と流水文銅鐸である。銅鐸の鋳型は発見されていない。身の上方や側面に小穴があいているのは、鋳型の外型と内型とを支える型持の痕である。

② 袈裟禪文銅鐸……横帯文式鐸の次期に当る定型式鐸である。原始的な絵画が描かれ、当時の風俗や生活の一端を示す貴重な資料である。表裏各々六区合計十二区割された各区に、動物や人物、家等の絵が興味深く描かれている。表面左上はとかげ・とんぼ、中段は踊りを踊っている人ともいわれるが、機織る姿をしたい。その右は鹿を弓で射るところ。下段は二人で米を搗いている姿と高床の穀倉が描かれている。裏面はとんぼ・かまきり・くも・すっぽん・いもり・魚をついばむさぎや・猪を追う狩人と数匹の猟犬が描かれ、表面の鹿と猪を狩る姿とを描き分けている。この銅鐸に描かれた絵画は、とんぼ・くも・かまきり・かめ・とかげ・さぎなどの動物は、すべて他の動物を捕えて食べる肉食動物ばかりで、とんぼから人間に至る迄生きるために闘う弱肉強食の世界を描き、穀倉を描き、米を搗く平和な農村生活の喜びをたたえた一巻の物語である。宝器又は祭器化し鐸を飾ろうとする意識があった事が認められる。岡山県に20個発見されているが、造りは立派でないらしいが、袈裟禪文銅鐸が多い。県北部の山間部にも銅鐸が現れるようになった。そこには銅鐸を獲得し得る程の「豊かさ」と「たくましさ」と社会的要求とが生じ、族長制が急速に伸展しはじめていた。さて部落国家が形成され、富と権力を持つ強者によって次第に統合され、北九州と大和が二大勢力を持ってきた。この二大勢力を表わす例として北九州に銅鐸・銅剣を大和に銅鐸の分布があげられるが、岡山県は両地方の中間に位する地理的条件と、県下の銅銚・銅剣・銅鐸の発見状態が大きくいって各両極限を表している事実は、吉備の古文化が北九州と大和の両文化を取り入れた誠に実り豊かなものであった事実を示している。この事実は更に古墳時代を見渡すとはっきりする。

(4) 銅鐸に見られる弥生時代の倭人の服飾倭人伝の記載が三世紀前半末の正始八年項迄の事とすれば、これは考古学における弥生末期時代である。埴輪土偶や記紀の伝承も肯定するが、やはり弥生式文化遺物の中に、この記載の実証を求めなければならない。袈裟禪絵文銅鐸の人物像で、これは同じ弥生式後期のものといわれているが、倭人伝の時代より少し古いものらしい。何分にも原始的な画様なので果してどれだけ当時の現実を伝えているか問題もあり多くの論考もある。弥生式時代の倭人の服飾を追求して見ると

① 鹿に向かって射ようとして弓に矢を番えた人物が描かれている。この人物は男性で恐らく側面で、更に他の面に猪を追う狩人と数匹の猟犬（これも鹿五頭にとりまかれ猪を射る人物と云う説もある）の絵の人物も男性で左手に弓を持ち右手をあげて矢を握っているとすれば、これも恐らくその男性の後姿であろう。その衣服を見れば背すじに一直線が見えるので、身項二枚を合わせた**横幅衣**のようである。

② 鹿一頭を射る男性の面のその左に機を織る人物（糸を紡ぐ人という説もある）と、その下に臼を杵で搗く二人の人物が描かれているが何れも女性であろう。前者は左手で織機にかけた糸に触れ、右手に緯の糸巻を持った女性で、いざり機の前に坐った姿とすれば、それは後姿である。臼を搗く二人の女性も恐らく臼を真中にして向い合っている。すると左は前向き、右は後向きで、この三人の女性の衣服は、前後とも三角形が見受けられて**貫頭衣**のようである。

③ 以上二点を考えると、倭人伝の記載とこの銅鐸の人物画像で実証出来ることになる。この銅鐸の人物像を眺めると、何れも肩にそって横に一線が引かれていて、左右両肩を通じて何か他の布があったのではないかと考えられる。これは横幅衣を着用した時、左右に広がりすぎて却って着にくくなることに気づく。そのため左右の肩を被うように横布を当てたものであったとよう

ようにも考えられる。後身も前身と同様に開いている。後身を合わせてあればよいが、後身迄開いているので、横布の必要があったのではなかったか。後身を合わせると、頸部のため今日の和裁のように肩で、横に一つ線の切れ目をつけなければならないし、このようにすれば前身にも工夫をこらす事になる。そこで更に進んだ裁ち方の手段を考えられなければならない後の発展があるようだ。

④ 出土不明の銅鐸画について この出土不明の銅鐸にも弓を引く男と、機を織る女の人物像が描かれている。その弓を引く男には、やはり女姿と同様に三角形の開きが見え、男も貫頭衣を着ていた事が分る。当時女も弓を引いたとすれば、別の事になるが、これによって高橋説のように横幅衣と貫頭衣との性別分化はなく、男女共通の事もあったと考えられるかもしれない。しかし横幅衣と貫頭衣とは二幅衣と一幅との差があって、肉体的に肩・胴・腰の大きいものは前者を、小さいものは後者をと考えると解決されそう。倭人伝に「男子」「婦人」と区別している事は、こゝではあまり問題にしない。又横幅衣でも貫頭衣と同様に頸部の前後に三角形の開きがあるので、その差は二幅が一幅か、前後の真中にその合せ目が一線あるかないかの事にすぎないようだ。史実として認めてよい資料と考えられる「原始衣」であるが、その他問題もあるのでこの分野について更に考究したい。

⑤ 絵のある壺

舟絵のある壺 弥生中期
奈良県唐古出土……壺の胴部に舟の絵がある。漁撈の図でなく、舟の後に遊ぶ水鳥らしい絵が描かれているので、低地帯唐古水辺における彼等の生活の一風景を一本の篋で表現されている。このほかに家の形、人物や鹿、猪等の土器片が発見されているが、このような絵の題材は、米を作るようになり安定した生活の一部が伺える。装飾文様の櫛描文より面白く、銅鐸にかかれた子供の絵のように稚拙素朴だが、線画の中に一つの行動が表現され、特徴をよくとらえて描く巧みさは見事である。このような絵から日本の絵画史の始まりといわれている。弥生後期倉敷市酒津出土の壺にも一本の篋描、木の葉が描かれているが、器形といい、器形と釣合った近代的な感じのする図案は美しい。弥生式土器や銅鐸に絵が描かれ、当時の風俗や生活の一端を示す貴重な資料と考えられる。

結 語

私達の祖先の服飾が具体的になってくるのは、古墳時代からであり、その意味で服飾史の出発点を探っている。服装は人間生活の一つの表現であり、一つの時代に常に代表的な服飾がある。第1報に引続き弥生時代における農耕生活の出現、最初の金属文化について、日本人の歴史的背景を考察した。弥生時代に生きた人々の人間らしい生活にふれたのだが、生活の著しい進歩がみられたのは認められたが、衣服についてはその存在を想定出来る位で具体的なものはつかめないが、その裏付を求めて、次回原始衣に発展させたい。

参 考 文 献

1. 佐良山古墳群の研究 津山市
2. 津山弥生住居址群の研究 津山市
津山市郷土館
3. 古代の服飾 猪熊兼繁著
4. 図説日本人の歴史 藤 直幹編
5. 岡山県文化財

- | | |
|-----------|-----------------|
| 6. 食物史 | 森末 義彰著
菊池勇次郎 |
| 7. 土器とはにわ | 村井富雄著 |
| 8. 国民百科事典 | 平凡社 |